（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	日下　紀子
論文題目	心理療法における「不在」に関する研究 ―セラピストのこころの機能と治療的相互交流をめぐる精神分析的理解―		

（論文内容の要旨）

本論文は、心理臨床におけるクライエントとセラピストとの二者関係において起こりうるセラピストの「不在」に着目し、その「不在」が治療関係や治療的相互交流にどのような影響を与え、どのような意義をもつのかということを検討したものである。さらにその考察において、セラピストのこころの機能とクライエントのこころに「在る」ことについて論考を深めていくことをも目的とされた。

論者の長年の心理臨床実践経験の中から、本論文で取り上げる「不在」について、次のような視点から分類された。まずセラピストが客観的に実在しない「不在」を「外的な不在」、そしてセラピストは客観的には実在してはいるものの、クライエントにはあたかも存在していないかのように主観的に「不在」と体験される転移状況を「内的な不在」－「主観的な不在」、セラピストのこころの機能が治療的には機能不全となる状況を「内的な不在」－「機能不全による不在」とした。これらの定義のもと、精神分析的心理療法の実践から検討を重ね、クライエントとセラピストの心理臨床における本質的な「関係性」について論考をすすめている。

第 1 章では、対象の「不在」をめぐり、現代社会の情報化や文明の発展によって“待たないでいい社会”に“待てない”こころの問題が現れていることを指摘する。先の「不在」をめぐる論考の視点を明快にまとめた上で、本論文の問題の所在と目的を明らかにしている。第 2 章では、母子関係にみる「不在」のあらわれに着目し、共働き家庭における母親の「不在」に関する先行調査研究や自身の臨床観察研究をもとにWinnicott,D.W.の「一人でいられる能力」と「酵素」としての“ほどよい母親性”について考察する。さらにセラピストのこころの機能が治療的に機能していることがセラピストとして存在することという前提のもとで、第 3 章では、セラピストのこころの機能に関する幅広い先行研究の概観整理を試みた上で、セラピストのパーソナリティや人間性、セラピストアイデンティティを中核にして 7 つの機能が重なり合うことを見いだす。第 4 章では、第 5 章以降に、精神分析的心理療法の実践から考察を深めていくための助走として、「不在」にまつわる情緒「かなしみ」や、セラピストの「外的な不在」への臨床技法的工夫を詳述する。

心理臨床実践事例に基づくより深い検討のため第 5 章では、セラピストの「外的な不在」を妄想－迫害性の不安を抱く事例との心理療法過程から、セラピストの逆転移感情への自己モニタリングの必要性を主張する。第 6 章では、セラピストの「不在」を契機に，クライエントの過去の心的外傷体験が再演された事例を取り上げ、セラピスト自身の罪悪感や、モニタリングの難しさに触れる。続く第 7 章では、セラピストの「内的な不在」－「主観的な不在」と「内的な不在」－「機能不全による不在」を体験した事例を取り上げ、「内的不在」をめぐる技法的考察として、逆転移感情のさらなる吟味とスーパーヴィジョン関係についての検討を行っている。第 8 章では、セラピストの「不在」の中から「在」を見出すこと、クライエントもセラピストも体験する「二重性」なるものと、心理療法の深奥に存在する「かなしみ」や「酵素」としての触媒作用をもつセラピストの存在について総合的な考察を行う。本論文が幅広く今日的なこころの問題理解に繋がる点を主張した上で、今後の課題として、心的外傷や対象喪失のこころの問題に開かれうる必要性に触れて、本論文は締めくくられている。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

心理臨床学や心理臨床実践における議論の対象は、クライエントと出会っている時間や枠組み、面接場面におけるセラピストの治療的かかわりや技法であった。そしてそこには、セラピストがクライエントの眼前に「在る」ことが前提となる。本論文の独創性は、セラピストの存在そのものの意義を問うために、セラピストの「不在」という大きなテーマに取り組んだ点にある。従って本論文では、セラピストの存在が心理臨床的な意味でクライエントに体験されるときはどのようなときか、あらためて問い直す。そしてセラピストのこころの機能が治療的に働いていることは、どのように作用しているものであるのかと問題を提起し、セラピストのこころの機能と治療的相互交流について検討している。

本論文の着想は、心理療法におけるセラピストの妊娠出産のもたらす意味、また母親が就労等の理由によって不在になる時間を子どもはどのようなこころで受け止めていくのか、といった疑問からうまれている。そして論者の長年の心理臨床実践経験から、本論文で取り上げる「不在」について、セラピストが客観的に実在しない「外的な不在」、セラピストは実在しているものの、クライエントにはあたかも存在していないかのように体験される「内的な不在」に分ける。さらに「内的な不在」は、「内的な不在」－「主観的な不在」と「内的な不在」－「機能不全による不在」に分類し、クライエントとセラピストの心理臨床における本質的な関係性、治療的相互交流について論考をすすめている。

論文の前半では、不在をめぐる先行研究のレヴユーを中心に、論者自身の独創的な視点をもとに問題提起を行った。まず第 1 章では現代社会の“待てない”こころの在り様を指摘し、第 2 章での「酵素」としての“ほどよい母親性”について議論が展開していく。さらにセラピストのこころの機能について、精神分析学にとどまらず幅広い先行研究を概観し、セラピストのパーソナリティ、人間性、セラピストアイデンティティを中核にして 7 つの機能が重なり合うことを第 3 章で見いだしている。その作用は，クライエントの病態水準や個々のクライエントとの関係性において多面性と多層性をもって複雑に働くものであり、その本質的な働きが「酵素」のようであると、独自の視点を提供している。第 4 章では、精神分析的心理療法の視点をもとに「不在」にまつわる「かなしみ」、セラピストの「外的な不在」を中心とした臨床技法的工夫についての検討がなされ、後半の事例研究での重要なキーワードとなっていく。

心理臨床実践からの検討となる第 5 章から第 7 章で取り上げられている事例は、いずれも、心理療法における困難事例と考えられる重篤な問題を抱えている。セラピストの「外的な不在」について、逆転移感情への自己モニタリングの必要性とその困難さについてクライエントの不安や「かなしみ」に焦点づけて考察を深めた第 5 章、第 6 章が本論文の中核的位置づけを持つ。転じてセラピストが実在していながら、クライエントにとっての「内的な不在」となる、困難な治療関係を振り返る第 7 章の事例研究が統合されていくことによって、多角的な考察がもたらされ、本論文の心理臨床学的価値を高めている。論者自身の丁寧かつ深い心理療法プロセスの記述は圧巻であり、それまで挙げてきたキーワードが見事に結実していき、その素材から考察への展開を読み手に十分納得させうると評価できる。総括となる第 8 章では、これまで論じてきた「酵素」や、「かなしみ」等のキーワードを重層的に検討し、「不在」に伴うかなしみや痛み、諦めきれなさやわりきれなさという「二重性」をクライエントもセラピストも生きるという本質的な関係性について考察していく展開も含めて、本論文が心理臨床学への大きな意義をもたらすものと評価された。

試問では、本論文で中核的に考察された逆転移感情をめぐる深い議論がなされた。そして、セラピストに湧き起こる感情とクライエント自身からの投影物に関する丁寧

な検討や、心理療法の中で、「不在」そのものを扱えるかどうかが、クライエントの病理水準の見立てに繋がるという指摘がなされた。また、本論文が日常用語を心理臨床の専門性に活かして論考を進めている特殊性から、記述される言葉の慎重さや図示によるまとめについて議論がなされた。しかしながらこれらの点は、本論文が心理臨床学において、さらなる発展の可能性を意味するものと位置づけることができ、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 27 年 1 月 7 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降